

2014年12月12日

皆様に私たちの診療を紹介するためにホームページを開設しました。定期的に更新し内容の追加を行いたいと思いますのでよろしくお願い致します。

日本経済新聞に以前書いた「現代人のカルテ」を紹介させて頂いておりますが、今読み返していると10年以上前に書いたものだけに内容が少し古くなっているものがあります。記事に書かれている病気の中には治療法が随分変化したものもあり、この10数年間の進歩を感じています。特に「腎がん」の稿では注釈を付けましたが、さらに少し追加したいと思います。

フォン・ヒッペル・リンドウ病（VHL病）という遺伝性の病気があります。この病気の人の家系では高率に腎がんを発症します。1990年代の初めにこの家系の人たちのゲノムを解析して、VHL病の人で異常になっている遺伝子が見つかりました。それはVHL遺伝子と名づけられました。正常なVHL遺伝子はある蛋白質（VHL蛋白）の産生を指令しますが、VHL遺伝子に異常があるフォン・ヒッペル・リンドウ病の人ではVHL蛋白がうまく出来ずに腎がんが出来やすい状況になるのです。すなわち正常なVHL遺伝子は腎がんの発症を抑えていたのです。さらに、VHL病でない人で腎がんを発症した人を調べてみても、高率にVHL遺伝子の異常が見つかったのです。

1990年代の後半になってVHL蛋白は腎がんの発癌を促進する蛋白の分解に関わっていることが判明し、それらに関連したタンパク質を標的にした一連の抗がん剤の開発につながりました。これらは分子標的薬と呼ばれ現在では保険適応のお薬ですが、いざ登場してみるといろいろな副作用があり、また一時的にがんの進行を抑える効果はあるものの転移した進行腎がんの根治はやはりとても難しい事がわかりました。この記事が書かれた1997年の時点での期待は確かにある程度実現したかもしれませんが、まだ途半ばと言ったところです。

(川嶋)

